ひみつはウンチ

こうやすすむ＝文　片山健＝絵　〈かがくのとも〉
1995年10月号　福音館書店発行　350円

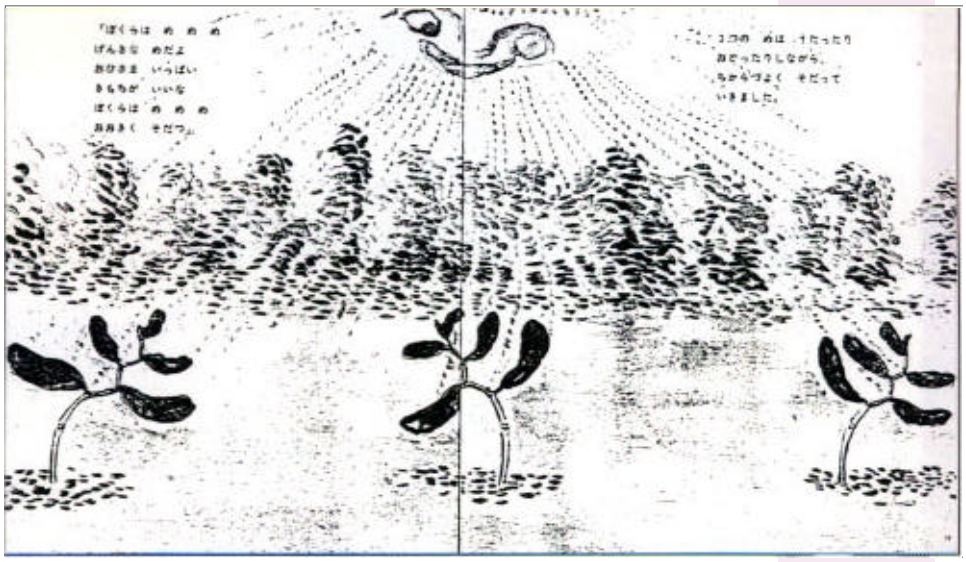
絵本の魅力は、おおざっぱに言って絵と物語をいっぺんに楽しめるところにあると思う。絵の芸術性を鑑賞し、絵の持つ物語性をよむ。絵の物語性とは、その絵だけでなく、その前後に連なる物語を想起させることで、ここがいわゆる〈絵〉を見るのと違う。そして文章で語られる物語を読み、言葉のリズムを味わう。そのすべてをぞんぶんに楽しめる絵本が、私にとっての「よい絵本」だ（書店に平積みになった「よい絵本」の帯つきの絵本とは一致しないこともよくあるけれど）

片山健の絵本は、いい。絵の力にまず強力に惹きつけられる。描線も色づかいも生命力にあふれている。森を描けばしっとりした空気や腐葉土の匂いがするし、画面に描かれないたくさんの生きものたちの、ざわざわした気配が伝わってくる。読み手の記憶を刺激して、写実的な絵や写真よりもっとリアルにイメージを喚起する。

山道を歩いていて、なんとなく生きものの感情を感じることはないだろうか。鳥やけものだけでなく、木や草の意志のようなもの。自分が受け容れられている、あるいは拒まれている感じ。私はよくある。ヘンかしら。でも片山の描く自然は、そんな経験を思い出させる。だから擬人化された木に違和感なくなじめる。

一方、文を書いたこうやすすむは大学教授で、樹木や森林生態などを研究している。絵本の仕事は『どんぐりかいぎ』『ぼくからみると』（いずれも福音館書店〈かがくのとも〉シリーズ）につづき、これで3作目になる。本書のテーマは種子の分散と分布拡大である。前作同様、テーマは専門分野だけれど、それを絵本の文章で書くのはとても難しいことだったと思う。

単に説明するだけなら知識があればできる。でもこれは知識を下敷きにしたフィクションなのだ。読んでおもしろくなくちゃだめなのよ。しかも長くなってはいけないし、易しい言葉でわかりやすく語らなければならない。リズムもかんじん。



陽射しをあびて育つ木の芽のやわらかさ、　たくましさ…みずみずしい喜びが伝わる。

裏表紙の絵

この絵本はそういう勘どころをきっちりおさえている。表紙から見返し（表紙の裏）まで堪能できる裏表紙の絵なんかすごーくいい。月刊絵本なので、残念ながら現在書店で見ることはできないが、たいていの図書館にあるはずだし、遠からず傑作集の仲間入りをして、ハードカバーになって発行されるものと期待する。

（本社企画室・南谷佳世）

◆著者紹介◆

こうやすすむ＝文　1942年神奈川県生まれ。　北海道大学農学部卒業。
現在、　専修大学北海道短期大学教授。
片山健＝絵　1940年東京生まれ。　『おやすみなさいコッコさん』　『おなかのすくさんぽ』　『タンゲくん』　など絵本の著書多数。

◆第12回　雁のシンポジウム　1996.12.7～8

於◆宮城県田尻町　　主催◆日本雁を保護する会

「雁と農業の共生をめざして」

シンポジウムが開かれる当日の朝、私を含めた参加者達は「蕪栗沼（かぶくりぬま）のガンの飛び立ち」を見るため、朝５時に起床して出かけました。バスから降りたとたんに、猛烈な寒さと、昨夜、懇親会にて出された銘酒「白雁」が足元をふらつかせ、沼への道のりはつらいものがありましたが、目の前に広がる光景に我々は一瞬息を飲んだのでした。飛び立ちの瞬間は見られなかったものの、朝焼けの蕪栗沼の上空には数百、何千羽というマガンの群が渦をまいて飛び、沼についたころには一面のマガンの大合唱と群舞に圧倒され、ただただ野生の美しさに感動するばかりでした。さて、シンポジウムはその後、主催者側も参加者側も互いに眠い目をこすりながら始まりました。

今回舞台となったのは宮城県田尻町内にある蕪栗沼で、ガンの渡来地として有名な伊豆沼より約８㎞南に位置しています。伊豆沼と違い、蕪栗沼は周囲をヨシ原に囲まれた自然度の高い原生的な沼です。今回の議題に取り上げられたのは「ガンと農業の共生」であり、ガンの生態学的な発表は少なく、ガンをとりまく自然環境と社会環境についてがおもなテーマになっていました。

午前中は蕪栗沼の自然環境をとりあげ、植物、水生生物、鳥類について報告がありました。水生生物ではゼニタナゴが確認されていることや、また鳥類では201種の記録があり、そのうちレッドデータブックに記載されているのはコウノトリをはじめ25種を数えるなど、貴重な野鳥の宝庫であることがわかります。ガンについては去年が約３万羽、今年は約４万羽（伊豆沼の個体群を含んでいる）といわれており、その利用形態はオオヒシクイが採餌場所として利用し、マガンはねぐらとして利用しているようで、伊豆沼と蕪栗沼を往復している個体が大部分を占めているそうです。

午後は、ガンと農業の関係について発表が行われました。蕪栗沼周辺ではガンの渡来日が９月中と早く、収穫が終わらないうちにガンの食害がでることがあります。伊豆沼の例では農業被害に対しての補償制度が紹介されましたが、それはマイナスを補う制度であり、いくら補償制度が進んでもガンにとってはけっしてプラスにならないのではないかという意見がでました。そこで紹介されたのが「初雁米」です。ガンの渡来日にあわせ、収穫を早くするなどガンの保護を全面に打ち出したことで付加価値をつけたブランド米です。値段は少々高くても、作る米自体に主義主張があれば売れるという、伊豆沼の補償制度とは逆転の発想となっていて、私もおおいに感心しました。実際この「初雁米」は生産が追いつかないほど売れており、成功している例といえます。

農業とガンの共生」という非常に難しいテーマに具体的な解決策はないと思います。ただ民間や個人レベルでは成功している例もあるようで、こうした例を紹介することが全国の農業家にとって有用であり、農業を営む人がガンの保護に関心をもつということが大切なのではないでしょうか。

（本社自然環境調査室・平川正詩）

〈日本雁を保護する会〉事務局　〒989-55　宮城県栗原郡若柳町字川南南町16
FAX:0228-32-3294　E-mail:hgh02256@niftyserve.or.jp